

シンポジウム

# 諸宗教の死生観と看取りの実践Ⅱ

2018年10月6日(土) 14:40-17:50 司会 渡辺和子 東洋英和女学院大学教授 死生学研究所所長

発題1

## 神 仁 じん ひとし

臨床仏教研究所 上席研究員  
東京慈恵会医科大学付属病院SCW

### プロフィール

公益財団法人全国青少年教化協議会主幹・常任理事、同付属臨床仏教研究所上席研究員、認定臨床仏教師スーパーヴァイザー、東京慈恵会医科大学講師、同付属病院スピリチュアルケア・ワーカー(チャプレン)、浄土宗心といのちの電話相談室相談役、日本精神衛生学会理事、公益財団法人国際宗教研究所評議員、鹿野苑法輪精舎住職などを務める。

### 主要業績

『仏教教育の実践』国書刊行会、2010。『いじめ・自死・孤独死』中村元当方研究紀要』2014。『ケアの現場で私たちに何ができるのか/臨床仏教師・臨床宗教師の養成事業の現状と今後の展望』日本仏教教育学会研究紀要第24号』2016。共著に『なぜ寺院は公益性を問われるのか』白馬社、2009。『臨床仏教入門』白馬社、2013。

## 臨床仏教師の役割

### —仏教チャプレンとしての支援と看取り—

### 内容紹介：

人生には必ず旅立ちがあります。ターミナルとは終末ではなく新たな旅立ちを意味するのです。高齢者などのケアにあたる介護者・看護者・宗教者が看取りに臨むにあたっては、まず自分自身の死生観を見つめることが重要です。今回のシンポジウムでは、発題の中で看取りの現場におけるスピリチュアルペインに対するケアのあり方についてご紹介したいと思います。諸外国の臨床現場において必須となっている「スピリチュアルケア(=いのちのケア)」の状況を踏まえつつ、日本においてどのような看取りのあり方が、ケア対象者のQuality of LifeおよびQuality of Deathを豊かにできるのか考えます。

発題2

## 白木原嘉彦 しろきはら よしひこ

天理教本芝大教会 会長

### プロフィール

1976年、慶應義塾大学法学部を卒業後、英仏に学ぶ。1981年に帰国後、天理教教会本部での修養を経て、小田原市で布教活動に従事。2001年、天理教本芝大教会五代会長に就任。2008年より天理教教会本部准員。その間、天理教海外部ヨーロッパ・アフリカ課長、布教部次長、ひのましんスクール運営委員長、表統領室詰、天理やまと文化会議・議長などを経て、現在、教化育成部基礎育成課長。

### 主要業績

『現代社会における教会の役割—地域に根差した「たすけ道場」—』天理教とキリスト教の対話Ⅱ—天理国際シンポジウム2002—』(天理大学・レゴリアン大学共催) 天理大学出版部、2002。天理やまと文化会議編『道と社会—現代事情を思案する—』天理教道友社、2004。

## 天理教の死生観と看取り

### 内容紹介：

この世は「神のからだ」とであると教えられ、その一部を私たちは身体として、ご守護と共にお借りしています。この「かしの・かりもの」の教理は、天理教の身体観の基本であり、死生観や救済観にもかかわる重要な視座となります。「かりもの」である以上、身体は、いずれ貸主である神にお返ししなければなりません。死を天理教では「出直し」と呼びます。「出直し」によって、心の働きは止まり、魂は、しばし親神様の懐に抱かれ、やがてまた、新しい身体を借りてこの世に生まれ変わってくる、すなわち来生があるということは、死ねば全てが終りではないということです。一布教師として体験した事例を紹介しながら、だれもが避けては通れない死をめぐる問題について、天理教の教えと信仰に照らしながら考えてみたいと思います。

発題3

## サック、キャロル

アメリカ福音ルーテル教会 宣教師

### プロフィール

(Carol Sack) アメリカ福音ルーテル教会(ELCA)の宣教師として1982年に来日。2000-02年に米国で音楽による死の看取りを学び、「音楽死生学士」の認定を受けて日本に戻る。2006年、日本福音ルーテル社団(JELA)が主催し、音楽死生学に独自の要素を加えて発展させた「リラ・プレカリア(祈りのたて琴)」を立ち上げた。リラ・プレカリアの修了生は、国内外の病院やホスピス、老人ホーム等の施設で活動している。

### 主要業績

『死に逝く人に寄り添う音楽—音楽死生学のとりくみ』『礼拝と音楽 No.129』2006年春号。

## 音楽による祈り

(発題者はリラ・プレカリア[祈りのたて琴]創始者)

### 内容紹介：

希望は何によってもたらされるのでしょうか？ 死が迫り、体の機能が低下し、衰弱する中で、愛する人々に別れを告げるだけの状態となった時、人はどのように希望を見出せるのでしょうか。霊的なものと物質的なものが交わる場所に存在する音楽は、永遠のミステリーである希望の淵源に私たちを導く何かを提供できるのではないかと私は考えています。苦しみの中にあるお一人お一人のベッド脇によりそい、静かで簡素なハーブの響きと歌声を祈り心で届けるとき、神様の恵みによって、死に逝く人に対してさえも、かすかな希望の光をととむことができるかもしれないのです。

□シンポジウム会場 東洋英和女学院大学大学院 (六本木) 201教室 東京都港区六本木5-14-40 shiseigaku@toyoiwai.ac.jp  
□最寄駅 六本木駅 (日比谷線徒歩10分) 麻布十番駅 (大江戸線徒歩5分、南北線徒歩7分)  
□参加費1,000円 (ただし、本学院在校生・教職員、生涯学習センター講座受講生は無料)  
□当日先着順100名様 □事前申込み不要

〈予告〉 2019年 1月12日(土) 受付開始14:10  
東洋英和女学院大学死生学研究所〈公開〉連続講座「生と死の物語Ⅱ」  
第7回 奥山礼子「ヴァージニア・ウルフの創作における死の問題」  
第8回 奥野滋子「高齢多死社会の看取り現場からの報告—人生の終い方を考える—」